インド哲学仏教学研究 16, 2009. 3

『アームナーヤ・マンジャリー』に見るサンヴァラ曼荼羅の解釈法

田中　公明

1　はじめに

筆者は 2008 年 11 月に，学位論文「インドにおける曼荼羅の成立と発展」により東京大学大学院から博士［文学］の学位を授与された．同論文の「研究篇」は，初期密教からインドにおいて最後に成立した『時輪タントラ』に至るまでの，曼荼羅の歴史的発展を跡づけることを目指している．しかし通史としての性格上，密教の各時代の曼荼羅をバランスよく記述するため，いくつかの論点については，詳しい論証を他稿に譲り，結論のみを述べた部分も少なくなかった．このうちいまだ公刊されていないものについては，学位論文提出後の 2007 年 12 月から 2008 年秋までに，他の学術誌に寄稿した論文によって，論旨を補強することができた．

学位論文「研究篇」第 6 章で取り上げた母タントラの曼荼羅についても，『理趣広経』から最初期の母タントラ『サマーヨーガ』まで，さらに『サマーヨーガ』から代表的な母タントラの一つ『ヘーヴァジュラ』に至る発展については，筆者の従来の研究により，いちおう説得的な論証ができたと自負しているが，いま一つの重要な母タントラである『サンヴァラ』については，先行する密教聖典の曼荼羅からの発展を，十分に跡づけることができなかった．

これはサンヴァラ系を代表する六十二尊，十三尊曼荼羅の諸尊が，従来の曼荼羅のそれと著しく異なっており，共通する尊格に乏しいからである．

しかしサンヴァラ系の諸尊を，先行する曼荼羅の尊格群と同躰視することにより，従来の曼荼羅理論を適用しようとする試みは，しばしばなされてきた．

このうち学位論文では，『サンヴァラ』ルーイーパ流の根本典籍である *Cakrasaṃvarābhisamaya*，サンヴァラ系の根本タントラ『ラグサンヴァラ』のウッタラタントラとされる『アビダーノーッタラ』，釈タントラとされる『ヴァジュラダーカ』『ヨーギニーサンチャーラ』等により，サンヴァラ系の諸尊と後期密教の曼荼羅理論を確立した『秘密集会タントラ』の「蘊・界・処」説のコンコーダンスを紹介した．

また『サンプタ・タントラ』V-ii の末尾部分[1]と，アバヤーカラグプタ（以下「アバヤーカラ」と略）による同タントラの註釈『アームナーヤ・マンジャリー』*Āmnāyamañjarī*[2] 18 にも同様の解釈が見られることも指摘したが，この他にも『アームナーヤ・マンジャリー』には，父母両タントラの尊格群の解釈について，興味深い説が多数紹介されている．

なお『アームナーヤ・マンジャリー』の成立は 11 世紀後半から 12 世紀前半に下がるため，サンヴァラ六十二尊曼荼羅が，どのように先行する密教体系から発展したかについ

---

[1] 北京 No.26, Vol.2 259-1-1～5.

[2] 北京 No.2328, なお以下で箇所を指摘する場合は，中国蔵学研究中心編『丹珠爾』（北京，1996）第 4 巻所収本を使用する．この『丹珠爾』については，テキストの信頼性を疑問視する向きもあるが，現在のところナルタン・デルゲ・北京・チョネの各版をいちおう対校した唯一の刊本である．

て，基本的資料とすることはできない．しかしアバヤーカラは同書において，先行する諸家の説を多数紹介しており，これによってインドで，母タントラで新たに導入された尊格群が，どのように解釈されてきたのかを知ることができる．

そこで本稿では，『アームナーヤ・マンジャリー』を読みながら，サンヴァラ六十二尊曼荼羅を中心に母タントラの曼荼羅解釈を再検討し，学位論文「研究篇」第 6 章の論旨を補強することにしたい．

2　『サンプタ』と『アームナーヤ・マンジャリー』について

それではまず，本稿の主題となる『サンプタ・タントラ』と『アームナーヤ・マンジャリー』について概観することにしたい

なお『サンプタ・タントラ』に関しては，長年同タントラに取り組んできた野口圭也氏の概説がある．[3]本節では，主として野口氏によりながら，その内容を概観するとともに，必要に応じて筆者の補足意見を述べることにしたい．

『サンプタ』は，チベットにおいて『ヘーヴァジュラ』『サンヴァラ』両系共通の釈タントラとされている．しかし，その曼荼羅の中で最も大規模な金剛薩埵曼荼羅には，代表的な父タントラである『秘密集会』系の尊格群が登場する．また III-i 所説のヘールカ曼荼羅には最初期の母タントラ『サマーヨーガ』の影響が見られるなど，『ヘーヴァジュラ』『サンヴァラ』両系にとどまらず，広く後期密教全般を総合しようとの編集意図が伺える．

同タントラは 11 章からなるが，第 11 章はウッタラタントラとされ，『チベット大蔵経』では『サンプタ・ティラカ』と呼ばれる別のテキスト[4]となっている．これに対して根本タントラに当たる第 1 章から第 10 章までは，それぞれ 4 節からなっている．本稿では，『サンプタ』の章節を指摘する場合，野口氏にしたがって，第 1 章第 1 節を I-i というように表記している．

なおネパールからは，同タントラのサンスクリット写本が複数発見され，野口圭也氏や T・スコルプスキー博士らによって，いくつかの章節の校訂本が発表されている．[5]また George Robert Elder 博士が，1978 年にコロンビア大学に提出した博士論文には，同タントラの I-i から iv までのテキストと英訳が含まれるが，同論文はいまだ公刊されていない．[6]

いっぽう同タントラの註釈は，『チベット大蔵経』に 3 篇が収録されているが，現在のところ，これらのサンスクリット原典は知られていない．しかし最近，チベットから『アームナーヤ・マンジャリー』のサンスクリット写本が発見されたとの情報があり，その真偽の確認が待たれている．

いっぽうネパールからは，『サンプタタントラ註』*Sampuṭatantraṭīkā* と呼ばれる貝葉写

---

[3] 野口圭也「サンプタ・タントラ」松長有慶編著『インド後期密教（下）』（春秋社，2006）pp.145–172.

[4] 北京 No.27, rGyud kyi rgyal po chen po dpal yaṅ dag par sbyor ba’i thig le źes bya ba.

[5] 詳しくは野口 2006, pp.153–154 を参照.

[6] 2009 年 2 月現在，同論文は以下の HP からダウンロードすることができる．
http://upload.exmisa.ro/files/Books/Religion/Buddhism/Vajrayana/faithweb.com/Chakrasamvara/samphutatantra.pdf

本が発見されている.[7]なお筆者が調査したところ，同文献は『チベット大蔵経』に収録される 3 篇の註釈の何れとも一致しない.『チベット大蔵経』所収の 3 篇のような逐語的な大部の註釈ではなく，達意釈というべきものであるが，冒頭から X-ii までの註が残存しており貴重である.

このうち『アームナーヤ・マンジャリー』は，11 世紀後半から 12 世紀前半に活躍したインド密教最後の巨匠アバヤーカラの大著であり，ツォンカパが『ガクリム』（密宗道次第広論）において頻りに同書を参照するなど，後世に与えた影響も大きかった．その構成は 40 篇のマンジャリーからなり，一々のマンジャリーが『サンプタ』の I-i から X-iv までの 40 の章節に対応している.

なお野口圭也氏は，アバヤーカラが『サンプタ』を重視したことから，彼自身が同タントラの編集に係わったとの意見を提出している.[8]ただし『アームナーヤ・マンジャリー』を読むと，アバヤーカラは,『サンプタ』の教説を祖述するに止まらず，自説や師説に基づく補説を広範囲に行っていることに気づく．アバヤーカラが，この著作を『秘伝（アームナーヤ）の花房（マンジャリー)』と名付けたのも，このような本文献の性格によるものと思われる.

3　サンヴァラ曼荼羅の構造

つぎに筆者が既に発表した他著と重複することになるが，本稿の主題となるサンヴァラ系の曼荼羅について，簡単に見てゆくことにしたい.

サンヴァラ曼荼羅には，62 尊（父母仏を 1 尊と計算すると 37 尊）系と 13 尊（父母仏を 2 尊と計算すると 14 尊）系の 2 種がある．このうち六十二尊曼荼羅は,『ラグサンヴァラ』*Laghusaṃvaratantra* の第 2 章に基づくといわれる.[9]いっぽう十三尊曼荼羅は，サンヴァラ系の釈タントラとされる『サンヴァローダヤ』*Saṃvarodayatantra* の第 8 章を典拠とする.[10]

サンヴァラ六十二尊曼荼羅は，内側から順次，大楽輪・意密輪・口密輪・身密輪・三昧耶輪の 5 層からなる.（付図参照）後述のように，この五輪は，それぞれ宝生・阿閦・阿弥陀・毘盧遮那・不空成就の五仏と関係づけられる.

大楽輪の中央には，主尊サンヴァラ Saṃvara とヴァジュラヴァーラーヒー Vajravārāhī の父母仏が描かれる．その周囲は八葉蓮華となり，四方にはダーキニー Ḍākinī・ラーマー Lāmā・カンダローハー Khaṇḍarohā・ルーピニー Rūpiṇīの 4 尊が，左旋に配置される.

以上 6 尊で構成される大楽輪の外側に，身口意の三密を象徴する三密輪が描かれる．これら三密輪は，本来は立体的に配置されるべきものだが，図絵する時は内側から意密輪・口密輪・身密輪の順となる．この三密輪には，それぞれ四方四維に 8 対の父母仏が描かれ

---

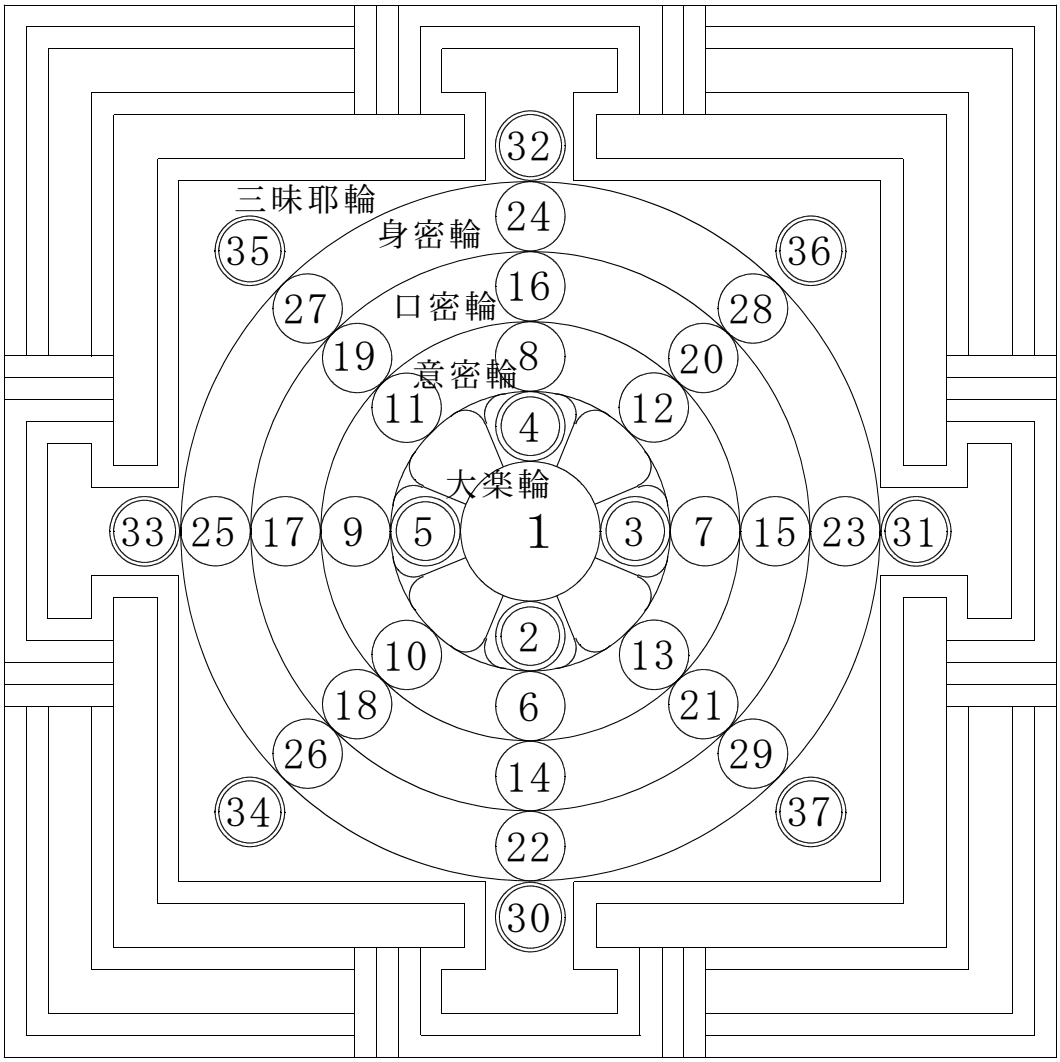
7 Nepal German Manuscript Preservation Project Reel No.C 26/1.

8 野口 2006, pp.157–159.

9 この問題は筆者の学位論文でも指摘したが,『ラグサンヴァラ』第 2 章の曼荼羅に関する記述は簡潔で，注釈書によらなければ，六十二尊曼荼羅を構成することはできない．これはサンヴァラ曼荼羅が,『ラグサンヴァラ』の成立時点では，いまだ現在見るような六十二尊形式になっていなかった可能性を示唆している.

10 Shiníchi Tsuda: *The Saṃvarodayatantra*, Selected Chapters, Tokyo 1974, pp.115–117.

付図　サンヴァラ六十二尊曼荼羅



註　尊名については表１ならびに３を参照。

るので，三密輪の尊数は 48 尊となる．なおこの 24 対の父母仏は，女性尊の名で呼ばれることが多い．

三密輪のさらに外側には，三昧耶輪が描かれる．三昧耶輪の四門には，カーカースヤー Kākāsyā ＝烏頭女（東）・ウルーカースヤー Ulūkāsyā ＝梟頭女（北）・シュヴァーナースヤーŚvānāsyā ＝狗頭女（西）・シューカラースヤー Śūkarāsyā ＝猪頭女（南）の四人の門衛の女神が描かれる．これら 4 人の門衛は，その成立過程が明確でないサンヴァラ系の女尊の中では例外的に，最初期の母タントラ『サマーヨーガ』に起源を有することが明らかになっている．[11]

また四維には，左右半身で異なった身色をもつヤマダーヒー Yamadāhī・ヤマドゥーティー Yamadūtī・ヤマダンシュトリー Yamadaṃṣṭrī・ヤママタニー Yamamathanīの 4 人のダーキニーが描かれる．

これらの女神のうち大楽輪の 4 尊と三昧耶輪の 8 尊は，父母仏ではなく独尊なので，全体の尊数は 62 尊となる．また父母仏を 1 尊と勘定した場合は 37 尊となるが，この 37 という数は，しばしば三十七菩提分法と関連づけられる．

これに対してサンヴァラ十三尊曼荼羅は，六十二尊曼荼羅の三密輪を省略し，大楽輪と三昧耶輪のみを描いたものである．なお歴史的に見た場合，この形式は，よりサンヴァラ曼荼羅の原初的形態に近いと思われる．

なお津田真一博士は，『サンヴァローダヤ』の校訂テキストの序文において，同タントラを現存するサンヴァラ系の中で最も古く，基本的なテキストとした．しかし杉木恒彦氏は，同タントラが早い時期の文献に引用されないことから，サンヴァラ系で最も遅い第 3 期の成立としている．[12]さらに杉木氏は，『ラグ・サンヴァラ』を，サンヴァラ系の中では最も早い第 1 期に分類するから，『サンヴァローダヤ』所説の十三尊曼荼羅が『ラグ・サンヴァラ』の六十二尊曼荼羅に先行するという見解は，成り立たなくなる．

この問題については学位論文の第 6 章［8］で論じたが，筆者は『サンヴァローダヤ』を第 3 期とする杉木説は，いささか年代の下げすぎであると考えている．これについては現在別稿を用意しているが，『サンヴァローダヤ』には，すでに津田博士が指摘した『パンチャクラマ』だけでなく『安立次第論』*Samājasādhanavyavastholī*など，『秘密集会』聖者流のテキストとの著しい親近性が見受けられる．

筆者が学位論文で論じたように，『秘密集会』ジュニャーナパーダ流がヴィクラマシーラを中心に栄えたのに対し，聖者流はナーランダーとの関係が深い．したがって『サンヴァローダヤ』を引用するテキストが少なく，しかも後期のものに限られるのは，このテキストがヴィクラマシーラで聖典と認められるのが遅れただけで，テキスト自体の成立年代を示すものではないと思われる．

---

[11] 『サマーヨーガ』の六族曼荼羅の 4 門衛は，東が馬頭女 rTa gdoḋ ma，南が猪頭女 Phag gdoṅ ma となる．西と南の門衛は sNaṇ ba ma と Thal byed ma となり，動物の頭をもつことが明確でないが，チベットに伝えられる儀軌類では，sNaṅ ba ma は烏 bya rog，Thal byed ma は狗 khyi の頭をもつと規定される．したがって『サマーヨーガ』と『サンヴァラ』の門衛は，4 尊のうち 3 尊が一致することになる．

[12] 杉木恒彦『サンヴァラ系密教の諸相－行者・聖地・身体・時間・死生－』（東信堂，2007 年）pp.12–19.

4　『アームナーヤ・マンジャリー』27 に見るサンヴァラ六十二尊曼荼羅

『アームナーヤ・マンジャリー』27 は，『サンプタ』VII-iii の註釈として書かれている．『サンプタ』VII-iii は，諸尊の真言を秘密の方法で記述する mantroddhāra を主題とするが，アバヤーカラは，その註においてサンヴァラ六十二尊曼荼羅の諸尊の本地 ṅo bo に言及しているのが注目される．

それによれば身口意の三密輪の男性尊，いわゆる「二十四勇者」caturviṃśativīra は，それぞれ普賢・文殊・世自在（観音）・地蔵・金剛手・弥勒・虚空蔵・虚空庫・除蓋障・香象・無盡意・智幢・弁積・除憂暗・滅悪趣・光網・月光・宝光・日光・金剛光・善財・大勢至・海慧・賢護の二十四大菩薩 bya chub sems dpa' chen po ñi śu rtsa bźi に他ならない．[13]

いっぽう彼らの配偶女神は，金剛使者女 rDo rje pho ña mo・准提 sKul byed ma・宝ターラー Rin chen sgrol ma・金剛作光女 rDo rje 'od byed ma・ヴェーターリー Ro laṅs ma・金剛童女 rDo rje gźon nu ma・カームボージー Kaṃ po dzi・仏菩提自在女 Saṅs rgyas byaṅ chub dbaṅ phyug ma・智慧ターラー Ye śes sgrol ma・ガウリー？ rDo rje 'jigs ma・ガンダーリー Gandhārī・有勝女 rGyal ba can ma・ターラー sGrol ma・白衣 Gos dkar mo・仏眼 sPyan ma・マーマキー Māmakī・幢頂母 rGyal mtshan rtse mo'i dpuṅ rgyan ma・大随求 So sor 'braṅ ma・大孔雀母 rMa bya chen mo・葉衣 Ri khrod lo ma can・金剛鎖女 rDo rje lcags sgrog ma・プラティアンギラー Phyir bzlog ma・仏頂母 gTsug tor ma・ヴァジュラバイラヴィー rDo rje 'jigs byed ma であるという．[14]

さらに三昧耶輪の 8 女尊の本地は，ガウリー Gaurī・チャウリー Chom rkun ma・rMoṅs byed ma・ヴェーターリー Ro laṅs ma・プッカシー Pukkasī・チャンダーリー gTum mo・ガスマリー Ghasmarī・ヘールカーバー Heruka'i 'od ma[15]というヘーヴァジュラ系の 8 女尊であるとし，サンヴァラ曼荼羅の特徴は，彼女たちの方便，すなわち配偶男性尊が，ヤマーンタカ gŚin rje gśed・ハヤグリーヴァ rTa mgrin・ヴィグナーンタカ bGegs mthar byed・プラジュニャーンタカ Śes rab mthar byed・タッキラージャ'Dod pa'i rgyal po・ニーラダンダ dByug pa sṅon po・大力 Stobs po che・不動 Mi g-yo ba という，『秘密集会』系の八忿怒になることであるという．[16]

いっぽう大楽輪のダーキニー・ラーマー・カンダローハー・ルーピニーの 4 女尊とサンヴァラの妃ヴァジュラヴァーラーヒーの本地は，色・声・香・味・触の五金剛女とするが，ヴァジュラヴァーラーヒーの本地については，ある説 kha cig では仏眼とし，また『アビダーノーッタラ』*mṄon par brjod pa bla ma* に随順して法界金剛女とすることもあるという．[17]（表 1 参照）

このうち身口意の三密輪の二十四勇者の本地は，意密輪の勇者に主として八大菩薩，口密輪と身密輪の勇者に，その他の 16 菩薩を配当していることが分かった．そして八大菩

13　『丹珠爾』4-559.

14　*ibid*.

15　ヘーヴァジュラ系の八女尊の最後は通常Ḍombīであるが，Herukābhā と呼ばれることもある．これはこの女神が，Heruka と同じ青黒色の身色をもつためと思われる．

16　『丹珠爾』4-559～560.

17　『丹珠爾』4-560.

表１　サンヴァラ六十二尊の本地（*Āmnāyamañjarī 27*による）

	尊　名	対応する尊格	配偶尊の尊名	対応する尊格
大楽輪	1.Saṃvara	金剛薩埵rDo rje sems dpa'	Vajravārāhī	触金剛女Reg bya rdo rje ma
	2.Ḍākinī	色金剛女gZugs rdo rje ma		
	3.Lāmā	声金剛女sGra rdo rje ma		
	4.Khaṇḍarohā	香金剛女Dri rdo rje ma		
	5.Rūpiṇī	味金剛女Ro rdo rje ma		
意密輪	6.Pracaṇḍā	rDo rje pho ña mo	Khaṇḍakapāla	普賢Kun du bzaṅ po
	7.Caṇḍākṣī	sKul byed ma	Mahākaṅkāla	文殊'Jam dpal
	8.Prabhāvatī	Rin chen sgrol ma	Kaṅkāla	世自在'Jig rten dbaṅ phyug
	9.Mahānāsā	rDo rje 'od byed ma	Vikaṭadaṃṣṭrin	地蔵Sa'i sñiṅ po
	10.Vīramatī	Ro laṅs ma	Surāvairi	金剛手Phyag na rdo rje
	11.Kharvarī	rDo rje gźon nu ma	Amitābha	弥勒Byams pa
	12.Laṅkeśvarī	Kaṃ po ji	Vajraprabha	虚空蔵Nam mkha'i sñiṅ po
	13.Drumacchāyā	Saṅs rgyas byaṅ chub dbaṅ phyug ma	Vajradeha	虚空庫Nam mkha' mdzod
口密輪	14.Erāvatī	Ye śes sgrol ma	Aṅkurika	除蓋障sGrib pa thams cad rnam par gsel ba
	15.Mahābhairavā	rDo rje 'jigs ma	Vajrajaṭila	香象sPos kyi glaṅ po
	16.Vāyuvegā	Gandhārī	Mahāvīra	無盡意Blo gros mi zad pa
	17.Surābhakṣī	rGyal ba can ma	Vajrahūṃkāra	智幢Ye śes tog
	18.Śyāmadevī	sGrol ma	Subhadra	弁積sPobs pa brtsegs pa
	19.Subhadrā	Gos dkar mo	Vajraprabha	除憂闇Mya ṅan daṅ mun pa thams cad ṅes par 'joms pa'i blo gros
	20.Hayakarṇā	sPyan ma	Mahābhairava	滅悪趣Ṅan soṅ kun 'joms
	21.Khagānanā	Māmakī	Virūpākṣa	光網Dra ba can gyi 'od
身密輪	22.Cakravegā	rGyal mtshan rtse mo'i dpuṅ rgyan ma	Mahābala	月光Zla ba'i 'od
	23.Khaṇḍarohā	So sor 'braṅ ma	Ratnavajra	宝光Rin chen 'od
	24.Śauṇḍinī	rMa bya chen mo	Hayagrīva	日光Ñi ma'i 'od
	25.Cakravarmiṇī	Ri khrod lo ma can	Ākāśagarbha	金剛光rDo rje 'od
	26.Suvīrā	rDo rje lcags sgrog ma	Śrīheruka	善財Nor bzaṅ
	27.Mahābalā	Phyir bzlog ma	Padmanarteśvara	大勢至mThu chen thob
	28.Cakravartinī	gTsug tor ma	Vairocana	海慧Blo gros rgya mtsho
	29.Mahāvīryā	rDo rje 'jigs byed ma	Vajrasattva	賢護bZaṅ skyoṅ
三昧耶輪	30.Kākāsyā	Gaurī	註　尊格の前の数字は、付図における位置を示す。	
	31.Ulūkāsyā	Chom rkun ma		
	32.Śvānāsyā	rMoṅs byed ma		
	33.Śūkarāsyā	Ro laṅs ma		
	34.Yamadāhī	Pukkasī		
	35.Yamadūtī	gTum mo		
	36.Yamadaṃṣṭrī	Ghasmarī		
	37.Yamamathanī	Heruka'i 'od ma		

薩に付加された 16 尊は，そのほとんどが賢劫十六尊から採られている．賢劫十六尊とは，金剛界曼荼羅等の外院に列する菩薩群で，曼荼羅の種類により複数の組み合わせがある．

B・バッタチャリヤは，アバヤーカラの『ニシュパンナヨーガーヴァリー』から，曼荼羅の外院に配される 3 種類の 16 菩薩の組み合わせを抽出している．[18]そしてバッタチャリヤの List No.1 は法界語自在曼荼羅，No.2 は『マーヤージャーラ』文殊金剛曼荼羅，No.3 が金剛界曼荼羅に説かれるものである．

このうち日本の賢劫十六尊に一致するのは No.3 であるが，他の二つの組み合わせも，金剛界曼荼羅の賢劫十六尊と多くの菩薩が共通している．（表 2 参照）

表 2 のように，二十四勇者の本地とされる菩薩との一致数は，List No.1 が 8，List No.3 が 9 であるのに対して，List No.2 は 12 となり，最もよく一致する．さらに『マーヤージャーラ』では残余の 4 尊のうち 3 尊が意密輪の 8 尊に対応するから，16 尊のうち 15 尊が一致することになる．

『マーヤージャーラ』については，『金剛頂経』系の瑜伽タントラから『秘密集会』への発展過程にあるとする説と，『秘密集会』の成立以後に，『秘密集会』と金剛界系を融合させたものであるとする両説が並び立っている．[19]しかし何れにしても後期密教と最も親近性があるのは『マーヤージャーラ』であるから，付加された 16 尊が『マーヤージャーラ』の菩薩群と最もよく一致するのは理解できる．

いっぽう女性尊には，『秘密集会』系の四仏母や『サマーヨーガ』から『ヘーヴァジュラ』に継承されたガウリー等の 8 女尊が含まれるが，その他では准提 Cundā・幢頂母 Dhvajāgrakeyūrā・大随求 Mahāpratisarā・大孔雀母 Mahāmayūrī・葉衣 Parṇaśabarīというように，陀羅尼を尊格化した女性尊が多いのが注目される．

陀羅尼信仰は初期大乗から存在し，その尊格化も初期密教から行われてきた．この場合，陀羅尼 dhāraṇīが女性名詞であるため，その尊格化も，しばしば女性尊となった．そして金剛界曼荼羅では，とくに三昧耶曼荼羅において，これら陀羅尼を尊格化した女性尊が，多く取り入れられている．

仏教では，歴史的ブッダが男性であったこともあって，ヒンドゥー教に比して有力な女性尊に乏しかった．その中にあって陀羅尼の尊格化が，仏教における女性尊格の主要な供給源となったことが，この事実からも裏づけられる．

このようにアバヤーカラは，サンヴァラ六十二尊の本地 ṅo bo を，それまでの密教で尊崇されていた種々の尊格に求めている．本稿 1 でも指摘したように，サンヴァラ系には，先行する密教聖典には全く現れず，その起源が明らかでない尊格が多数含まれている．

アバヤーカラが『アームナーヤ・マンジャリー』27 において，『サンプタ』本文には記述がないサンヴァラ六十二尊の本地を詳述したのは，尊格群の上で孤立しているサンヴァ

---

[18] B.Bhattacharyya: *The Indian Buddhist Iconography*, 2nd edition, Culcutta 1968, pp.82–83.

[19] 川崎一洋氏は当初，松長有慶博士にしたがって『幻化網』（マーヤージャーラ）を『初会金剛頂経』と『秘密集会』の中間に位置づけたが，「『幻化網タントラ』に見られる五秘密思想」（『密教文化』211，2003）では，『幻化網』（マーヤージャーラ）が『秘密集会』を引用していると指摘した．これに対して大観慈観氏は「ラトナーカラシャーンティ註『クスマーンジャリ』にみる『秘密集会タントラ』の構成について」（『密教文化』216，2006）において，川崎説を批判している．

表２　賢劫十六尊と口密・身密輪の勇者

	バッタチャリヤのList No.3系			List No.1	List No.2	サンヴァラ口密・身密輪の勇者の本地
	金剛界	『浄諸悪趣経』	Buddhaguhya	法界語自在	Māyājāla	
東方	①弥勒	①慈氏	①大精進	①普賢	①弥勒	除蓋障(東)
	②不空見	②不空見	②普賢	②無盡意	②文殊	月光(東)
	③滅悪趣	③除一切罪障	③月光	③地蔵	③香象	光網(東北)
	④除憂暗	④破一切憂闇	④賢護	④虚空蔵	④智幢	賢護(東北)
南方	⑤香象	⑤香象	⑤光網	⑤虚空庫	⑤賢護	智幢(南)
	⑥大精進	⑥勇猛	⑥虚空蔵	⑥宝手	⑥海慧	金剛光(南)
	⑦虚空蔵	⑦虚空蔵	⑦金剛蔵	⑦海慧	⑦無盡意	弁積(東南)
	⑧智幢	⑧智幢	⑧無量光	⑧金剛蔵	⑧弁積	善財(東南)
西方	⑨無量光	⑨甘露光	⑨智幢	⑨観音	⑨大勢至	無盡意(西)
	⑩月光	⑩月光	⑩除憂暗	⑩大勢至	⑩滅悪趣	日光(西)
	⑪賢護	⑪賢護	⑪無盡意	⑪月光	⑪除憂暗	除憂闇(西南)
	⑫光網	⑫熾盛光	⑫弁積	⑫光網	⑫光網	大勢至(西南)
北方	⑬金剛蔵	⑬金剛蔵	⑬弥勒	⑬無量光	⑬月光	香象(北)
	⑭無盡意	⑭無盡意	⑭香象	⑭弁積	⑭無量光	宝光(北)
	⑮弁積	⑮弁積	⑮滅悪趣	⑮除憂暗	⑮虚空庫	滅悪趣(西北)
	⑯普賢	⑯普賢	⑯不空見	⑯除蓋障	⑯除蓋障	海慧(西北)
	９＋(３)	９＋(３)	９＋(３)	８＋(５)	１２＋(３)	

註　下線を引いたのはサンヴァラ三密輪の男性尊の本地に一致するもの。最下段の左側の数字は右欄との一致数、最下段右側の(　)内の数字は、右欄に含まれない意密輪の８尊との一致数。なお賢劫十六尊の虚空蔵Gaganagañjaは、意密輪の虚空蔵ではなく虚空庫に一致する。

ラ系を，先行する密教体系とパラレルに解釈しようという意図の現れと思われる．

5　『アームナーヤ・マンジャリー』18 に見るサンヴァラ曼荼羅の教理概念への配当

すでに先行研究で明らかにされているように，サンヴァラ六十二尊曼荼羅の尊数は，父母仏を 1 尊と勘定すると 37 尊となり，これを三十七菩提分法に配当するのがサンヴァラ系で常套的に見られる解釈法となった．

本稿 1 で見たように，『サンプタ』V-ii の末尾部分には，サンヴァラ系の諸尊と『秘密集会』で確立した「蘊・界・処」説のコンコーダンスが説かれている．ところがアバヤーカラは，これを註した『アームナーヤ・マンジャリー』18 において，『サンプタ』の所説を大幅に敷衍し，曼荼羅全般の教理的解釈を詳説している．[20]

それは，所依の曼荼羅の清浄 rten dkyil ’khor gyi rnam par dag pa と題して，曼荼羅の楼閣や外周部の各部分の教理概念への配当を述べた後，能依の諸尊の清浄 brten pa’i lha’i rnam par dag pa と称して，曼荼羅の諸尊の教理概念への配当を詳述するという二段階からなっている．

このうち能依の諸尊の清浄では，まず『秘密集会』ジュニャーナパーダ流の文殊金剛曼荼羅の 19 尊の教理概念への配当を述べた後，『秘密集会』聖者流の 32 尊については，ジュニャーナパーダ流との異同についてのみ述べる．このように聖者流に対してジュニャーナパーダ流を優先させるのは，『ヴァジュラーヴァリー』『ニシュパンナヨーガーヴァリー』にも見られるアバヤーカラの密教解釈の特徴であり，彼がジュニャーナパーダ流の強固な伝統が存在したヴィクラマシーラの学匠であることを示している．

つづいて「このタントラでは」rgyud ’dir ni と述べて，『サンプタ・タントラ』所説の金剛薩埵曼荼羅について述べ，ついで「明王の曼荼羅」rig pa’i rgyal po’i dkyil ’khor と題して，サンヴァラ曼荼羅の諸尊の教理概念への配当について述べる．

その配当は，まず大楽・意密・口密・身密・三昧耶の各輪の眷属尊を，それぞれ宝生・阿閦・阿弥陀・毘盧遮那・不空成就に配当する．さらに六十二尊曼荼羅を構成する女性尊 37 尊を三十七菩提分法に配当し，三密輪の二十四勇者を身体の 24 の構成要素「二十四界」[21]に配当する．なおここまでは，他のサンヴァラ系のテキストにも見られるオーソドックスな解釈法である．

ところがアバヤーカラは，この後「他の設定では」rnam par bzhag pa gshan yang と述べて，他のテキストには見られない特異な教理概念への配当を紹介している．[22]

これは主尊サンヴァラを 19. 大悲，サンヴァラを囲繞する大楽輪の 4 女尊を慈悲喜捨の 2. 四無量，三密輪の女尊の筆頭である Pracaṇḍā を 8. 願智，Caṇḍākṣīから Mahābhairavā までを 4. 九次第定，Vāyuvegā から Cakravarmiṇīまでを 5. 十遍処，Suvīrā から Mahāvīryā までを 11. 四種一切相清浄，三昧耶輪の動物の頭をした四門衛を 14. 四無畏，Yamadāhī 以下の四維の女神を四摂事に配当するものである．いっぽう三密輪の二十四勇者は，

20　『丹珠爾』4-383〜407.

21　二十一界については，拙著『性と死の密教』（春秋社 1997）pp.128–130 を参照．なお杉木 2007, p.91 表 2–3 は，筆者の説に対して若干の修正を試みている．

22　『丹珠爾』4-398〜399.

Khaṇḍakapāla から Amitābha までが 9. 六神通，Vajraprabha から Vajrasattva までが 20. 十八不共仏法[23]に配当されている．（表 3 参照）

なおここでサンヴァラ曼荼羅の諸尊に配当される教理概念は，四門衛に配当された四摂事以外は，すべて『現観荘厳論』法身章において，法身の構成要素とされた二十一種無漏智に含まれている．なお四摂事は，金剛界曼荼羅の四門を護る四摂菩薩に配当されて以来，常套的に曼荼羅を外敵の侵入から護る尊格に配当されてきた．サンヴァラ曼荼羅の四維を護る Yamadāhī以下の 4 女尊に四摂事が配当されたのは，そのためと思われる．

すでに他稿で論じたが，二十一種無漏智は，三十七菩提分法と『摂大乗論』『大乗阿毘達磨集論』所説の仏功徳法を合成したものと考えられる．[24] なおアバヤーカラは，二十一種無漏智を智法身として別立するハリバドラの四身説を批判し，三身説を強力に主張したことで知られている．そして曼荼羅の諸尊を三十七菩提分法に配当するサンヴァラ系の通説の他に，アバヤーカラが，諸尊を二十一種無漏智を構成する仏功徳法への配当を紹介したことは，彼がサンヴァラ曼荼羅の諸尊を，如来の法身の顕現と考えていたことの証左となるであろう．

6　『アームナーヤ・マンジャリー』34 に見る母タントラ系女尊のコンコーダンス

『サンプタ・タントラ』IX-ii は，主として尊格へのトルマ gtor ma の奉献を説く比較的短い章節である．ところがアバヤーカラは，それを註した『アームナーヤ・マンジャリー』34 において，母タントラの曼荼羅に登場する女性の尊格群相互の対応関係を説いている．[25]

アバヤーカラは，『サンプタ』IX-ii に説かれる五ダーキニー mkha’ ’gro lṅa について，まず彼らをジュニャーナ・ダーキニー Ye śes mkha’ ’gro ma・ヴァジュラ・ダーキニー rDo rje mkha’ ’gro ma・ゴーラ（・ダーキニー）Drag mo・ヴェーターリー Ro laṅs ma・チャンダーリー gTum mo であるとする．これらは，『サンプタ』III-ii 所説のジュニャーナ・ダーキニー曼荼羅の主尊と四方に配される 5 人の女神に相当する．なおこの曼荼羅は，初期の母タントラの一つ『チャトゥシュピータ』所説のジュニャーナ・ダーキニー曼荼羅から取り入れられたと考えられる．[26]

つぎに同タントラ所説の大王女 rgyal mo che とは，シンヒニー Seṅ ge mo・ヴィヤーグリー sTag mo・ジャンブキー Ce spyaṅ mo・ウルーキー’Ug pa mo であるという．これらは，同曼荼羅の中心部の四維に配される動物の頭をもった 4 人の女神に相当する．

さらに金剛自在女 rdo rje dbaṅ phyug ma[27]とは，ダーキニー mKha’ ’gro ma・ディーピニー gSal byed ma・チューシニー’Jib byed ma・カームボージー Kam po dzi であるとい

23　日本では十八不共仏法を十力・四無畏・三念住・大悲とすることが多いが，表 3 は，『現観荘厳論』「一切相現等覚章」の所説に従って作表している．

24　この問題については，拙稿「チベット仏教における三身説と四身説の設定－『現観荘厳論』「法身章」所説の二十一種無漏智 zag pa med pa’i ye shes sde tshan nyi shu rtsa gcig po の解釈を中心に－」（『日本西蔵学会会報』55 所収予定）で詳しく論じた．

25　『丹珠爾』4-686～687.

26　野口 2006, pp.161–162.

27　なおテキストには rdo rje dbaṅ phyug ma とあるが，前後関係から見て rdo rje dbaṅ mo とするのが正しいと思われる．

表３　サンヴァラ六十二尊に配当される教理概念（*Āmnāyamañjarī* 18による）

	尊　名	対応する教理概念	配偶尊の尊名	対応する教理概念
大楽輪	1.Saṃvara	19.大悲	Vajravārāhī	般若智
	2.Ḍākinī	2.慈（四無量）		
	3.Lāmā	2.悲（四無量）		
	4.Khaṇḍarohā	2.喜（四無量）		
	5.Rūpiṇī	2.捨（四無量）		
意密輪	6.Pracaṇḍā	8.願智	Khaṇḍakapāla	9.神足通（六神通）
	7.Caṇḍākṣī	4.初禅（九次第定）	Mahākaṅkāla	9.天眼通（六神通）
	8.Prabhāvatī	4.二禅（九次第定）	Kaṅkāla	9.天耳通（六神通）
	9.Mahānāsā	4.三禅（九次第定）	Vikaṭadaṃṣṭrin	9.他心通（六神通）
	10.Vīramatī	4.四禅（九次第定）	Surāvairi	9.宿命通（六神通）
	11.Kharvarī	4.空無辺処（九次第定）	Amitābha	9.漏盡通（六神通）
	12.Laṅkeśvarī	4.識無辺処（九次第定）	Vajraprabha	20.身無失（十八不共仏法）
	13.Drumacchāyā	4.無所有処（九次第定）	Vajradeha	20.口無失（十八不共仏法）
口密輪	14.Erāvatī	4.非想非非想処（九次第定）	Aṅkurika	20.念無失（十八不共仏法）
	15.Mahābhairavā	4.滅盡定（九次第定）	Vajrajaṭila	20.無不定心（十八不共仏法）
	16.Vāyuvegā	5.地（十徧処）	Mahāvīra	20.無異想（十八不共仏法）
	17.Surābhakṣī	5.水（十徧処）	Vajrahūṃkāra	20.無不知捨心（十八不共仏法）
	18.Śyāmadevī	5.火（十徧処）	Subhadra	20.欲無減（十八不共仏法）
	19.Subhadrā	5.風（十徧処）	Vajraprabha	20.精進無減（十八不共仏法）
	20.Hayakarṇā	5.青（十徧処）	Mahābhairava	20.念無減（十八不共仏法）
	21.Khagānanā	5.黄（十徧処）	Virūpākṣa	20.三昧無減（十八不共仏法）
身密輪	22.Cakravegā	5.赤（十徧処）	Mahābala	20.慧無減（十八不共仏法）
	23.Khaṇḍarohā	5.白（十徧処）	Ratnavajra	20.解脱無減（十八不共仏法）
	24.Śauṇḍinī	5.空（十徧処）	Hayagrīva	20.身業随智慧行（十八不共仏法）
	25.Cakravarmiṇī	5.識（十徧処）	Ākāśagarbha	20.口業随智慧行（十八不共仏法）
	26.Suvīrā	11.所依（四種一切相清浄）	Śrīheruka	20.意業随智慧行（十八不共仏法）
	27.Mahābalā	11.所縁（四種一切相清浄）	Padmanarteśvara	20.智慧知過去世無碍（十八不共仏法）
	28.Cakravartinī	11.心（四種一切相清浄）	Vairocana	20.智慧知未来世無碍（十八不共仏法）
	29.Mahāvīryā	11.智（四種一切相清浄）	Vajrasattva	20.智慧知現在世無碍（十八不共仏法）
三昧耶輪	30.Kākāsyā	14.正等覚無畏（四無畏）	註　法数の前に付された数字は、『現観荘厳論』所説の二十一種無漏智の番号を示す。	
	31.Ulūkāsyā	14.漏永盡無畏（四無畏）		
	32.Śvānāsyā	14.説障法無畏（四無畏）		
	33.Śūkarāsyā	14.説出道無畏（四無畏）		
	34.Yamadāhī	布施（四摂事）		
	35.Yamadūtī	愛語（四摂事）		
	36.Yamadaṃṣṭrī	利行（四摂事）		
	37.Yamamathanī	同事（四摂事）		

う．これらは，同曼荼羅の四門の門衛の女神に対応する．

つぎにアバヤーカラは，『サンプタ』III-iv 所説の金剛薩埵曼荼羅においては，五ダーキニーは，金剛慢女 rDo rje sñems ma・仏眼 sPyan ma・マーマキー Mā ma kī・白衣 dKar mo・ターラー sGrol ma の 5 尊であるという．これは金剛薩埵曼荼羅の中心に描かれる金剛薩埵の妃と，金剛薩埵の四維に配される四仏母に相当する．

いっぽう大王女は，同曼荼羅においては第二重 rim pa gñis に描かれるヴァジュララウドリー rDo rje drag mo 等，金剛女王 rdo rje dbaṅ mo は外帯に描かれる華女 Me tog ma 等であるという．

さらにアバヤーカラは，「明王の曼荼羅」つまりサンヴァラ曼荼羅では，五ダーキニーとは，サンヴァラの妃ヴァジュラヴァーラーヒー rDo rje phag mo と大楽輪の四方に配されるダーキニー・ラーマー・カンダローハー・ルーピニーであるという．そして大王女はプラチャンダー Rab tu gtum mo 等の身口意三密輪の女神，金剛自在女は，カーカースヤー Khwa gdoṅ ma 等の三昧耶輪の女神であるとする．

最後にアバヤーカラは，ヘールカの曼荼羅を取り上げ，そこでは五ダーキニーが，ヘールカの妃ナイラートミヤーと，その四方に配されるガウリー等であり，大王女は四維に配されるプッカシー等の 4 女尊，金剛女王は四門の門衛であるハヤースヤー rTa gdoṅ ma 等であるとする．

このようにアバヤーカラは，『サンプタ』所説の五ダーキニー・大王女・金剛女王という範疇を用いて，母タントラの曼荼羅に登場する尊格群の対応関係を定めている．なお『時輪』の大註釈『ヴィマラプラバー』「智慧品釈」は，サンヴァラ六十二尊曼荼羅と『時輪』の尊格群の間に対応関係を設定している[28]が，『アームナーヤ・マンジャリー』34 では，母タントラを代表する『ヘーヴァジュラ』『サンヴァラ』両系に，『サンプタ』『チャトゥシュピータ』も加え，母タントラの尊格全般について対応関係の設定を試みたという点で，注目に値するといえよう．

7　まとめ

このように本稿では，インド密教最後の巨匠といわれるアバヤーカラグプタの『アームナーヤ・マンジャリー』を読みながら，後期密教の母タントラを代表するサンヴァラ六十二尊曼荼羅の教理解釈について見てきた．

『アームナーヤ・マンジャリー』は，基本的には『サンプタ・タントラ』の註釈であるが，本稿で取り上げた教理解釈の多くは，『サンプタ』の本文には明確に説かれず，アバヤーカラ独自の補説と考えられる．

今回取り上げた三つのトピックのうち，『サンプタ・タントラ』自らが，サンヴァラ系諸尊の教理解釈を明確に説いているのは，『サンプタ』V-ii の末尾部分のみであるが，この部分は *Cakrasaṃvarābhisamaya* や『アビダーノーッタラ』など，先行するサンヴァラ系のテキストに同様の記述が認められ，『サンプタ』のオリジナルとは見なしがたい．

したがってアバヤーカラが同著において，サンヴァラ六十二尊曼荼羅の教理解釈を再三に亘って取り上げたのには，別の理由が考えられる．

---

[28] Jagannatha Upadhyaya: *Vimalaprabhā*,Vol.3, Sarnath 1994, 13–14.

すなわち同じ後期密教でも，『秘密集会』『ヘーヴァジュラ』『時輪』等の曼荼羅は，先行する大乗・初中期密教の尊格群を引き継いでおり，相互の対応関係を設定するのが容易であった．これに対してサンヴァラ六十二尊曼荼羅は，インド密教史上重要な曼荼羅であるにもかかわらず，他の密教体系と共通する尊格群に乏しく，孤立している．

アバヤーカラが『アームナーヤ・マンジャリー』で，多くの紙数を割いてサンヴァラ六十二尊曼荼羅の教理解釈を論じたのは，このユニークな密教体系と，インド後期密教の標準的曼荼羅理論の統合を意図したからと思われる．

このように，一つの規範となる解釈を提示し，他の体系については，それとの異同を論じるという手法は，アバヤーカラが『ヴァジュラーヴァリー』『ニシュパンナヨーガーヴァリー』でも多用した論述方法である．ツォンカパが『アームナーヤ・マンジャリー』を重視したのも，同書が『サンプタ』という一密教聖典の註釈に止まらず，異なる密教体系全般の整合的解釈を意図していたからに他ならない．

巻頭に述べたように，『アームナーヤ・マンジャリー』の成立は 11 世紀後半から 12 世紀前半に下がるため，サンヴァラ六十二尊曼荼羅が，どのように成立したかについて，アバヤーカラ自身の解釈から推測することには無理がある．

しかしアバヤーカラが紹介した解釈の中には，彼自身のものというより，彼が伝えた師資相承の口伝ともいうべきものが含まれている．彼が同書を『秘伝（アームナーヤ）の花房（マンジャリー）』と題したのも，そのためと思われる．

サンヴァラ六十二尊曼荼羅の成立は，筆者が学位論文において完全には解明できなかった課題の一つであるが，『アームナーヤ・マンジャリー』に紹介された口伝の中には，その問題を解くヒントが隠されているのではないかと期待される．

2009.2.3 稿

たなか　きみあき　　東方研究会研究員・慶應義塾大学講師

Interpretations of the Saṃvara-maṇḍala found in the Āmnāyamañjarī

Kimiaki Tanaka

The 62-deity maṇḍala of Saṃvara is one of the most important maṇḍalas in late tantric Buddhism. However, the position of this maṇḍala in the history of tantric Buddhism is rather problematic since it inherited a very small number of deities from preceding tantric systems and introduced many hitherto unknown deities.

Attempts to identify the deities of this maṇḍala with preceding maṇḍalas and to interpret it in accordance with the norm of maṇḍala theory of late tantric Buddhism, particularly that of the *Guhyasamājatantra*, have already been made by several Indian interpreters. Among those, I found unique interpretations in the *Āmnāyamañjarī*, a commentary on the *Sampuṭatantra* by Abhayākaragupta.

In this article, I mainly introduce three different interpretations of the Saṃvara maṇḍala by Abhayākaragupta found in the 18th, 27th and 34th chapters of the *Āmnāyamañjarī* and consider the meaning of the 62 deity maṇḍala of Saṃvara.